

畜産試験場だより

和牛試験場

この頃雨の多いことには閉口しております。しかし私達畜産の関係者にとってはありがたい雨でもあるわけです。と申しますのは、牧草や飼料作物が雨のめぐみで日に日に伸びて行くからです。

◎先般政府が公表しました「農産物の需要と生産の長期見とおし」によりますと、昭和46年における生産のみとおしを、34年に比べ、牛乳は3.5倍、肉は3倍、卵は2.8倍とっております。これにみあって飼料の需給のみとおしでは、国内産の飼料（濃厚飼料粗飼料合わせて）の生産が今の2倍にふえる前提のもとに、なお46年には可消化蛋白質で40万トン可消化養分総量で400万トンの不足がみこまれ、これを輸入にまたなければならぬとしますと、約600万トンの濃厚飼料の輸入が必要だとしております。なぜこのような計算になるかと申しますと、将来大いにふえると見込まれる家畜が、乳牛であり、豚であり、鶏でもあります。これら濃厚飼料にたよらなければ飼っていけない家畜の多いため、どうしても濃厚飼料が必要になってくるわけです。乳牛にしても比較的良質の粗飼料が入用ですし、和牛も肉用として飼われるものが多くなればなるほど、やはり濃厚飼料や良質の粗飼料が多く要るみとおしになってくるわけです。

一方畜産はこれからの農業の花型だとみられながらもいろいろな問題をかかえております。その中に飼養規模の零細なために生産費が割高である。労働生産性が低い。ということが問題となっております。それに多頭数飼育に持って行こうとすれば、家畜導入や設備改善のために資金がたくさん要る、などの問題にぶつかる現状です。

◎別の角度から農林省が先に公表しました肉畜の生産費調査の中の仔牛の生産費に占めるエサ代の割合は、全体の49.8%。すなわち大体半分がエサ代となっております。肥育牛の場合のエサ代は30.9%と率が低くなっておりますが、これは素牛代が57.6%を占めているためです。豚の場合のそれは牛よりも当然高率で、それぞれ58.7%、44.7%を示しております。

す。このように多くの経費を必要とする飼料を自給でまかなえればこれに越したことはなく、畜産の妙ていは自給飼料の増産確保にあるということであらためて認識させられる次第です。

多くの輸入飼料を前提とした畜産の振興に大いに研究の余地が残っているというわけで、ここに和牛が地味ながらも堅実に畜産の中に、今も将来も大きな地位を占めるゆえんが改めてみなおされると思っております。

◎つぎに同じく飼育労働費もばかになりません、すなわち、全経費中仔牛生産で23.5%、肥育で7.6%がこれに当たっております。これは設備を改善して多頭飼育にもって行けば、目にみえて少なくすることができますが、この点からも和牛は、少ない労働で、しかも質のよくない労力で飼える家畜でありますし、現に資源が豊富にあるために多頭化にもっていきやすい、ますます窮乏する農家の労働事情をみこして、和牛はかつ好の家畜ということができると思います。

◎和牛試験場ではいま、緑したたる牧草地に牛が群がり遊び、圃場には若い飼料作物がすくすく伸び、1年中で1番よい時季になっております。

飼料作物の栽培については、4月下旬から11月上旬までの、半年あまりで勝負しなければならないという制約を受けておりますので、場員一同目下わき目もふらずに一所懸命やっております。一見のどこに見える風景にも、実は血のにじむような苦労が刻み込まれている、といってもあながち誇張ではないと思っております。それはそれとしまして、さきほど申し述べましたような観点から、今年の試験研究課題を取り上げておりますが、その中から主なものをひろって御紹介したいと思います。

◆自給飼料を主とした若牛の肥育試験

肥育には必然的に濃厚飼料が多く必要なわけですが、これを節約して、しかも肥育成績を落とさないことが経済的な肥育であるという観点に立って、過去2回の試験に引き続き、今年も試験することにしております。さきの和牛試験場だよりで、去年の試

岡山畜産便り 1962.07

験成績の概要を説明いたしましたが、そのあらましを反復してみますと、濃厚飼料は普通の飼い方をして1,100kg使ったものに比べて、540kgと大体半分ですませ、そのかわりに良質の粗飼料を普通のものの2倍の大体8,000kg(生草量)用いた試験区の牛が、仕上りが幾分のおとり、肉牛の売上は安かったにもかかわらず、もうけははじめ予想しましたとおり、濃厚飼料を節約した方がよかったという結果になっています。今年も同じねらいで10頭の若令去勢牛を用いて試験することにしております。

◆省力管理のための予備試験

つぎにこれからの和牛肥育のすすめ方の1つとして、省力管理方式の確立が望まれますが、今年は予備試験として、自動給餌器を用い、スタンションに並べて飼い、相当徹底した省力管理のための予備試験を行なう予定にしております。これにより省ける手数をできるだけ省き、しかも良い肉牛を造ることができるならば、労働生産性を極度に上げる自信が得られることとなります。

◆飼料添加剤応用試験

なお肥育にホルモンを利用したり、特殊なエサを用いたりすることがだんだん実用化の域に達しておりますので、あらためてホルモン肥育や「モレヤー」、(アメリカのもので、糖みつと尿素が主成分となっている濃いドロドロの褐色の液体)を給与することにしております。

◆産肉能力の検定試験

これからの和牛は肉牛としての能力の高いことが望まれております。すなわち早く大きくなって、体の巾や深みが十分あり、太りやすい、しかも資質がよい(毛はだなどがよい)ものが経済能力の高い牛とされておりますが、これは種牛の良し悪しが大きく影響しますので、和牛改良の目安として、前年度にひき続いて産肉能力の検定を実施しております。

その方法は、12頭の父親の異なった若令去勢仔牛の肥育を、6頭ずつ2組に分けて生後6~7ヵ月から11ヵ月間行なって、生後17~8ヵ月で体重が450kgになることを目標にしております。同じ条件で肥育を行なった2組の、それぞれの飼料の利用性、肉牛の仕上がり、などを検討して種牛の優劣を判定しようというやり方です。

◎いま和牛試験場には種雄牛、種雌牛にしようとする育成中のもの、産肉能力検定の牛、繁殖雌牛と、それらの仔牛と合わせて50頭の和牛が飼われていますが、前途の試験牛が近く入りますと、70頭にふくれ上がることとなります。またスウェーデンランドレース種の豚が、5月上旬からつぎつぎとお産をしており、15頭の親豚にいま100頭あまりの仔豚が出来ておりますので、なかなかぎやかな状況になっております。いまが1年中で1番気候もよし、どうか皆さん和牛試験場へおいでくださいまして、直かにこれらのことを見聞していただければありがたいと思っている次第です。

(6月20日記)

ラジオ農業学校 畜産関係放送番組

(NHK岡山第2 午前6時40分から7時)

岡山=1600、津山=1540、新見=1540 キロサイクル

[7月]

19(木) 飼料 草地造成のあり方 中島大二

25(水) 和牛 和牛の管理 三代伍朗

26(木) 飼料 牧草の話 栗山光春

30(月) 養鶏 比較的多い鶏の病気 大西務

31(火) 飼料 草生改良はこのように 栗山光春

[8月]

2(木) 飼料 牧草地管理上の要点 栗山光春

9(木) 飼料 サイレージの理論と品質 栗山光春

16(木) 飼料 秋から冬へかけての飼料作物(1)
三秋 尚

23(木) 酪農 これからの酪農経営(1)
今本香豆彦

27(月) 飼料 秋から冬にかけての飼料作物(2)
三秋 尚

28(火) 養鶏 秋びなの育すう 川崎 晃

30(木) 酪農 これからの酪農経営(2)
今本香豆彦